

「被災した地域の子どもたちとの交流事業」

1. 「J r. チャレンジ富士登山

－福島と御殿場の中学生の夏の挑戦－

平成 23 年 8 月 1 日（月）～5 日（金） 4 泊 5 日

2. 「南三陸町の子どもたちとのサマーキャンプ

－今年の夏、生涯の友達をつくる－

平成 23 年 8 月 17 日（水）～23 日（火） 6 泊 7 日



後援：静岡県教育委員会
御殿場市教育委員会

I 事業の背景（必要性）

3 月 11 日 14 時 46 分、未曾有の東日本大震災が発生し想定を遙かに超える巨大な津波によって、東北地方に生活する人々は一瞬にして生活のための家や財産など全てを失い、また家族をも失ってしまった人々が多くいました。この悲惨な現状を目の当たりにしてきた子どもたちは心傷つき、明るく元気な姿を見せることができなくなってしまうのではと考えました。そこで中央交流の家ではその子どもたちの傷ついた心を癒し、元気づけることが必要であると考え、本事業を実施しました。

II 事業の概要

1. 趣 旨

- (1) 震災や避難生活で傷ついた福島県の中学生と南三陸町の小学生の心を、同世代の仲間との交流により癒し元気づけ、生涯にわたる友情を築きます。
- (2) 富士登山に挑戦することにより、自信を持ち、困難な中でもたくましく生きる力を身につけます。
- (3) 被災していない地域の子どもたちが、震災や避難生活を送っている同世代の仲間に触れることにより、震災をより身近に感じるとともに、前向きに生きる気持ちを育みます。
- (4) 自然と人とのつながりを考えるとともに、自他の生命を尊重する心情を育みます。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

「J r. チャレンジ富士登山－福島と御殿場の中学生の夏の挑戦－」

福島県の中学生男子 19 人・御殿場市の中学生男子 9 名、女子 9 名

「南三陸町の子どもたちとのサマーキャンプ－今年の夏、生涯の友達をつくる－」

南三陸町の小学校 5・6 年生男子 10 名、女子 10 名

被災していない地域の小学校 5・6 年生男子 10 名、女子 10 名

(2) 参加状況（南三陸町の子どもたちとのサマーキャンプ）

<内訳>

	男子	女子	合計
5 年生			24
6 年生			16
合計	20	20	40

<参加地域>

	男子	女子	合計
南三陸町	10	10	20
御殿場・裾野・小山	5	4	9
沼津・三島	4	5	9

神奈川県	1		1
和歌山県		1	1

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成（交流の家作成）（資料 1）
- ② 御殿場市、裾野市、小山町、沼津市、三島市の全小学校 5 年生～6 年生の全児童に配付（各学校、クラスごとに人数分の募集チラシを準備し、各市町教育委員会を訪問し、各学校のボックスに投函する方法をとりました）。
- ③ 静岡県中・東部地域の小学校に募集チラシを配付。
- ④ 中央交流の家を利用経験のある小学校に募集チラシを配付。
- ⑤ 県内および首都圏での新聞掲載を依頼。【参加者の募集とともに寄付等の依頼】

3. 日 程

日	曜	午前	午後	夜
17	水	(南三陸町出発)	一般集合 16:00, 南三陸町着 17:00, 対面・交流	
18	木	仲間づくりの活動	富士山学習「樹空の森」見学 富士登山準備	(株) 時之栖夕食会
19	金	富士登山 (須走口)		山小屋泊 (本 7 合目)
20	土	山小屋発→頂上→下山 (須走口)		自由な時間
21	日	富士山麓での植樹 (御殿場口 5 合目)	「こどもの国」での活動計画 (グループミーティング)	御殿場市子供会との 交流レクリエーション
22	月	富士山「こどもの国」での自然体験活動・創作活動 (グループ活動)		お別れ会
23	火	中央発 9:00, 一般解散 10:00		

4. 内 容 (活動の様子)

(1) 「仲間作り」・「目標作り」



国立中央青少年交流の家 職員

- ① 南三陸町の小学生と被災していない地域の小学生が出会い、ゲームを通じて一緒に心と体のウォーミングアップをしました。
- ② グループに分かれてグループの仲間との交流ゲームをしました。グループは南三陸町の小学生とそれ以外の地域の小学生男女を半数ずつ分けました。
- ③ 問題を解決するゲームを行いグループ全員の協調性を育み、グループ内での会話が增え、笑顔が多く見られるようにしました。
- ④ 「仲間と一緒に支え合い・励まし合って富士登山に挑戦する」気持ちを持たせるため、個人の目標・グループの目標、また、グループ内で聴けるといい言葉や言動、ルールを確認し、目標設定を行ないます。そして、1 枚の大きな旗に一人ひとりが想いを描き、見える化することで意識するようになりました。

(2) 「富士山学習」 講師：富士山樹空の森 副支配人 石田 眞吾 氏

- ① 職員から富士山の自然環境についての話を聞き、富士山の四季の移り変わりや、自然環境の変化についてのビデオを鑑賞し、登山への意欲を高めました。

- ② 施設内での自由な時間を、グループでの行動にすることで、仲間同士の関係をさらに深めました。

(3)「富士登山」 富士山ガイド：やまぼうしの会 平川 卓也 氏

【須走口5合目～本7合目山小屋(3200m)泊～悪天候のため5合目へ下山】

- ① 登山の準備は、用具の使い方を説明し、実際に自分で装着できるようにします。また、登山ルートを確認し、歩き方や高山病の予防、緊急時の行動等、富士登山の危険さ・困難さを伝えました。
- ② 登山の準備もグループ全員で一緒に行ない、登山靴の履き方や雨具・スパッツの装着の仕方などをお互いに教え合い、確認し、協力して準備をします。登山への不安感や安易感を取り除き、仲間と一緒に頑張れるという気持ちを持たせました。
- ③ 登山開始時はグループのボランティアリーダーが積極的に声を掛けて、小学生が自然と声を出しやすいように雰囲気作りをしました。
- ④ 大雨と寒さの中での登山であったが、自分のことよりもグループの仲間のことを心配し、どうしたら仲間が頑張れるかを考え、自分にできることは励ますことだと多くの子どもたちが積極的に行動しました。
- ⑤ 山小屋での宿泊では高山病にかかり苦しむ仲間を思いやりながら、自分自身も体調を崩さないように自己管理をどのようにするか考えました。
- ⑥ 登山に使用した用具を大切に片付けることで、多くの人に協力をしてもらい登山ができたことに感謝し、今後の生活にどう活かすかを考えました。
- ⑦ 登山の振り返りでは個人・グループで設定した目標が達成されたか、また、その理由をグループの話し合いにより意識させることで、子どもたち自身が頑張ったことや足りなかったことに気づくようにしました。



(4)「富士山麓での植樹」 講師：富士山ナショナルトラスト【御殿場口5合目】

- ① 自然を守る活動を体験することを通して、自然への畏敬の念を抱き、自然を大切にすることを育て、自分達にできることはどのようなことなのかを考えました。
- ② 未曾有の大震災に見舞われた南三陸町の小学生が、それでも自然と共生していくことをあらためて考え、被災していない地域の小学生に対して、自然を大切にすることの大事さを伝えました。



(5)「富士山こどもの国での自然体験・創作活動」 講師：こどもの国園長 中村 偉文 氏

- ① 事前にグループごと、こどもの国での行動計画を相談しながら、合意形成を図り、グループの全員に参画意識を持たせることで、グループでの活動を思い切り楽しめるようにしました。
- ② 園長より、富士山周辺に見られる動物の生態や保護活動、なぜ、自然環境について興味や関心を持たなければいけないのかなどのお話を聞きました。
- ③ グループごとに計画したカヌー体験やポイントラリー、また、木工作活動を楽しみました。また、あいにくの雨のために計画した内容が変更になる時にもグループでまとも

って相談してから活動するなど、グループ内の絆は深まっていきました。

(6)「キャンプのまとめ」 中央交流の家 職員

- ① グループごとにキャンプを振り返り、感想や目標の達成度とその理由を話し合い、一人ひとりが体験を言語化することにより、自己の成長や仲間とのつながりを確認しました。
- ② まとめとして手紙を書く場所を自由に自分で選び、他の人と話さずに自分でじっくりこれからの自分の生き方を見つめ、1年後の自分に手紙を書きました。手紙は1年後に参加者のもとに交流の家から送られます。

(7)「お別れ会」 中央交流の家 職員

- ① 7日間のキャンプでの思い出に残るシーンをスライドショーにまとめ、日を追うごとに変わっていく仲間の表情や感動の場面を振り返り、仲間との絆を強いものにしていきました。
- ② 「仲間と一緒に支え合い・励まし合って富士登山に挑戦する」ために作成した、一人ひとりの目標・グループの目標の書かれた大きな旗を囲み、ひとり一言キャンプの思い出を語りました。仲間の想いを聴いて、感動の涙を流す子どもたちが多くいました。
- ③ 生涯にわたる友達ができた記念に、一人ひとりに用意したTシャツにそれぞれの仲間が寄せ書きをし、キャンプでの出会いを大切な宝物にしました。



5. 評価

(1) 評価の方法（アンケート調査の実施）

- ・ 参加児童に対して「キャンプではどんなことが楽しかったか」「キャンプに参加する前後での自分自身の変化」についてなどのアンケート調査を実施しました。

(2) 結果

- ① 40人中38人の子ども達はキャンプ全体がとても楽しかった、2人が楽しかったと答えていました。
- ② 具体的にどんなことが楽しかったかという質問には、「他の地域の小学生と一緒に過ごしたこと」「グループの仲間と一緒に活動したこと」と答えた子ども達が38名いました。
- ③ キャンプの前と後での変化について、できるようになったと32名の子ども達が答えた項目には「自分の意見をはっきり言えるようになった」、「自分から進んでなんでもやるようになった」、「誰とでも優しい気持ちで接することができるようになった」、「他の人を励ますことができるようになった」、「何事にも一生懸命に取り組むようになった」など全13項目がありました。
- ④ ふだんの生活における元気度とキャンプ後の元気度の変化では、ふだんの生活での元気度90%以上と答えていた子どもは8名であったが、キャンプ後には31名の子ども達が元気度90%以上、24名の子どもが100%と答えていました。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ① 事業を企画する上で、「思い」の原点を平成23年3月11日（金）東日本大震災という未曾有の大震災で被災した子どもたちのために、中央交流の家ができることをやりたいということとしました。
- ② 被災した子どもたちにとって何が必要かを考えることからはじめ、楽しい思い出をたくさん作り、傷ついた心を癒し元気づけることであると考えました。
- ③ 子どもたちにとっての「楽しさ」とは何かを考えた結果、被災した子どもたちだけを招待することではなく、「同世代の仲間との交流で得られる楽しさ」、「生涯にわたる友達をつくる」こととしました。
- ④ 被災していない地域の子どものたちとの交流事業にすることで、被災していない地域の子どものたちにとっても、震災の悲惨さや避難生活の困難さを現実的なものとして捉えたり、同世代の仲間が頑張っている姿を見て自分も頑張るという気持ちを持つような「学び」の機会としました。
- ⑤ 被災していない地域の子どもの達とスタッフに対して、被災した地域の子どもの達との接し方、心掛けていきたいことなどを事前に専門家から講義を受ける場を設定しました。
- ⑥ 富士登山への挑戦では、数ある登山の形態から子ども達の身体能力・精神的な部分を考慮し、本7合目山小屋での泊を伴う1泊2日での十分に余裕のある計画を立てました。
- ⑦ 富士登山に対する準備として、用具の確認とともに一人ひとりが自分で装着できること、仲間と一緒に困難なことに立ち向かう気持ちを高めることを目的に準備のための時間を一度でなく数回に分けて計画しました。
- ⑧ 自然の猛威によって傷ついた子ども達にとっても、今後も自然は必要不可欠な舞台であり、自然との共生を図っていくことが大切であると考え、自然環境の保全に関わる専門家から自然との関わりについて話を聞き、保全活動の体験をすることを企画しました。
- ⑨ グループの絆をさらに深めるための遊びの時間を、遊戯施設ではなく、広大な自然を利用したこどもの国での自然体験活動の場として設定しました。

2. 運営のポイント

(1) 協力を得られる教育委員会を探すこと。

- ① その内容については現地での参加者の募集や取りまとめ、事前連絡及び実際の事業時における引率・指導を依頼しました。

(2) 寄付金等の支援をいただくこと。

- ② その内容は被災した地域の子どものたちのための、必要運営費及び運営の支援を市民からの支援金や企業等の関係機関へ依頼し、支援をいただきました。

(3) 補助スタッフの確保と指導。

- ① 当所の登録ボランティア、他の国立青少年教育施設でのボランティア経験のある者、また、被災地からの大学生ボランティアが参加できました。
- ② 各グループにリーダーとして2名ずつ配置したことで、子ども達の話し合いやグループ活動が円滑に行なわれました。
- ③ 事前打合せとしてボランティアスタッフの心構え・職員との意識の共有を図り、キャンプ中は毎日の打ち合わせで情報の共有と子ども達への接し方を確認しました。

3. 指導のポイント

(1) キャンプに臨むにあたり個人の目標を達成するために、グループが協力することによりキャンプ全体の目標を一人ひとりが意識して行動できるような指導をしました。

①目標

ア. プログラムの中心となる富士登山に対して「仲間同士で支え、励まし合って登る」という気持ちになるような指導。

イ. グループ活動を通して、仲間を信頼し、仲間との絆を強く深められる指導。

②方法

ア. グループの一人ひとりが目標を考えて、その目標を意識して行動できるようにします。

イ. グループ全員で同じグループの仲間がどのような目標を考えたかを共有します。

ウ. グループの一員として、一人ひとりがグループ内で大切にしたいことやルールを考えて全員でグループの目標をつくります。

エ. 「見える化」することで、グループの仲間とともに意識し、取り組んでいけるようにしました。

オ. グループの振り返りでは、目標を達成するために頑張ったことや足りなかったことを話し合い、その後の活動にどのように活かしていけるかをグループ全員で考えました。

4. 成果

① 個人、グループに目標の設定をさせ、その目標を意識し共有する指導の方法をとることで仲間との絆を強く深めることができた。

② 地元企業をはじめ様々な団体の支援を得ながら実施した本事業は、参加した子どもたちにとってかけがえのない生涯にわたる友情と今後の生活に向けての元気を送ることができた。

5. 今後の課題

① 企画の段階から協力していただく教育委員会、交流の家担当者間での十分な意思疎通（思いの共有）が必要であるため、協力を得られる教育委員会を早期に探すことが大切であると思われます。

② 指導する職員が指導のノウハウを互いにフィードバックし合いながら、より適切で目標を達成するために必要な知識・技術を身につけていくことであると考えました。

③ 一過性ではなく継続した支援として事業を実施するにあたり、被災した地域の子ども達に対する心身のケアに繋がるプログラム内容の検討と、それ以外の地域の子ども達が震災を風化させずに防災に関する意識の向上に繋がるプログラムを検討していきたいと思えます。

6. 参考資料

(1) 資料

① アンケート用紙

② 実施案

担当：望月省吾，佐粧和也，内海隆博